

竜楽のおじゃまします！



三遊亭竜楽 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。日本脚本家連盟所属。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。



植野妙実子教授

うえの・まみこ 1981年中央大学大学院法学研究科博士課程満期退学。82年から中央大学に勤務。93年中央大学理工学部教授。女性に対する暴力と人権やジェンダー差別と法など、人権に関わる研究に取り組んでいる。

フランス流 男と女のいる人生

竜楽 竜楽のお邪魔します。第7回で初めて女性のゲストということですが、私も気合を入れて着物を着て参りましたが、実は植野先生のことは以前から存じあげています。渋谷にある西野流呼吸法でご一緒させていただいています。その教室で踊ったりして。植野先生を知らなければもぐりではないか、というぐらい有名な方です。

植野 いえいえ、そんなことはないですよ。私は子供の頃にバレエをやっていましたから。

竜楽 あつ、それあの踊りになるわけですね。

植野 わからないけれど(笑)。

竜楽 ところで呼吸法を始めたのは何かきっかけがあるんですか。

植野 小さい時からNHK等で西野バレエ団を見て、あこがれの存在でしたので、西野皓三先生が呼吸法をやっているのだつたら是非やってみたいと思います。

竜楽 体調でも悪かったんですか。

植野 最初は冷え性とか、疲れが出やすいなど、どちらかというと婦人病系の感じがありました。また胃も悪かったです。どうしても書く仕事が目だと同じ姿勢をずっと続けていますので、何かスポーツをやりたいと思っていました。ハードなスポーツだと、そのあと体が使いたいならなくなるし……。でも、西野流呼吸法に行ったら、これはもう私にピッタリなスポーツだと思います。疲れも来ないし、リフレッシュした感じになる。それから、よく眠れる。食べ物もおいしくなる。それで今まで13年ぐらい続いています。

竜楽 苦痛じゃないというのが一番いいですね。

植野 楽しいし、あそこに行くと皆さんからも元気をいただきます。みんなパワフル。こういう言い方をしたらへんですが、病気の方でも皆さんパワフルですよ。教えられるところが多く、とても勉強になります。なによりも学会のような狭いところで暮らしていると、考えが似かよった感じになってしましますが、あそ

こへ行くとは本当にサロンのようにいろいろな職種の人たちとお話ができたりして、そういう意味でも楽しいです。

文化や制度の違いとは

竜楽 ところで、そんなパワフルな先生、海外への留学や国際会議などで活躍されていますが、初めて留学されたのがフランスですよ。

植野 私費で4カ月間留学しました。

竜楽 その頃のことからお伺いしたいと思います。

植野 79年、大学院の学生だった時にフランスへ行きましたが、一番びっくりしたのは女性の活躍する姿でした。当時、日本ではまだ女性が大学を出てもまともに就職できない状況でした。特に民間企業には難しい。私の中央大学法律学科の同じクラスに女性は6人ぐらいいました。公務員になったのが1人。あとは法律事務所に入った人と司法書士と税理士。民間に入ったのは出版社

の編集者で入ったのがたった1人でした。しかも、彼女も非常に苦勞したという状況でした。私の妹が、5歳下ですが、大学を出て東急デパートに入った時、4大卒の給料表がなくて短大卒のを使っていたほどです。

そのくらい日本では女性の就職が厳しい時代に、フランスでは大学教員の3分の1は女性だったんです。

しかし、当時のフランス人の女性教授に言わせると、それは講師とか助手に多いのであって、必ずしも教授職で対等に働いていないからこんなことではだめだと聞かされました。

女性の活躍では、日本と50年ぐらい違いがあるのかなと、その時に思いました。今でも日本女性の状況が追いついたとは思えませんね。女子学生の意識はかなり変わってきましたし、総合職に勤めるのはあたりまえという気持ちにはなりましたが、フランスの女性の地位と比較するとまだまだです。それにフランスの女性には、家庭の中でも職場でもとにかく男性と対等だという気持ちが非常

に強いのです。日本はどうしても補助的になる。男性のほうも補助的な仕事をさせてよしとしています。

竜楽 今、女子学生の意識が変わってきたという話がありました。先生から見て現在の女子学生の意識というのはどう感じますか。

植野 中大に関して言えば、キャリアをつくることに對してとても積極的になってきていると思います。民間に就職することに関して果敢に挑戦しています。みんなそれなりの目標を持って、女性が仕事をすることに生き甲斐を感じるようになってきたと思います。だから、企業は女性たちが働きやすい環境を是非にも作って欲しいと思います。

その点フランスは大変進んでいると思いますが、フランス女性自身はまだまだ不十分だと言っています。フランスの法曹界を例に取ると裁判官と弁護士との2者に関しては女性が50%以上を占めています。ですから、女性の視点から見た裁判のあり方とか、法律の解釈の仕方とか、そうい

うことは浸透していると思います。

ただ、裁判長となると女性はあまりいないということで、数ではなくて、地位を高めることを要求しています。

フランスでつい最近、パリテ法というのが制定されました。これは選挙の候補者に関して男女を同数にするという男女同数法です。国連あたりで議論しているのはクオータというかたちで、一定の割合を女性に割り当てるといふ割当制ですが、フランスはこの割当制を飛び越して同数にする法律ができて、政界での女性の数を一挙に増やそうとしています。このように、やる時にはある種、インパクトのあるやり方を歓迎するところが革命を起こした民族性かなという感じはします。

竜楽 私もフランスに行った時、男性がすごくやさしくて、女性が日本人のイメージかもしれませんが厳しい感じがしました。

植野 そうかもしれません。でも、窓口とか何かに並ぶ時のこつは、男性は女性のほうに並んだほうがいい



す(笑)。

竜楽 切符を買う時に、売ってくれないんです。

植野 えっ。

竜楽 南仏にいたんですが、イタリヤまで売ってくれない。フランス国内しか売れないと言ってます。

植野 たぶん機嫌

が悪かったんだと思います(笑)。

竜楽 しょうがないから、しばらくして男性に代わってかへ行ったら、売ってくれました。

多くて、普段接触している同じ人間

でありながら、あれっ、今日はかなり機嫌が悪いな。そういう時にはこちらはとてとまどいます。実は、

エクサンプロバンスに小さな郵便局があるんです。中央大学とエクサンプロバンスの大学とは協定があり、学生のレベルでも交換留学をします。中大王も語学研修など行くチャンスが多いところです。

竜楽 エクサンプロバンスに泊

まったんです。いいところですよ。天気がよく、素敵なところでしょう。

植野 あっ、そうですか。いつも

その郵便局に有名なおばさんがいて、その人は機嫌どおりに仕事をする人で、機嫌が悪いと切手を売ってくれないんです。ある時、私は日本に手紙を出すのに切手が必要で、あつちは何でも列を作りますから、並んでいたんです。しかも話をするから1人当たりの対応時間が長いのです。

さいと言ったら、切手はないと言

んです。びっくり返りましたね。郵便局なのになぜないのか。いつも切手を出す切手帳はちゃんと脇にあるんです。切手帳はそこにあるじゃないかと言ったら、いや、切手はないんだと言いはるのです。2、3日たつてから彼女とまた対面してしまっ

たのですが、今度はここにこしながら切手をくれました。こんな対応を仕方ないと受け止めたり、こういう国なんだと楽しむぐらいの気持ちでいればいいんでしょうけれど、日本人ですとノイローゼになる人もいます。

それから、人と人の関係ではなく国と個人との関係を考えると、フランスでの一つの例として、同棲している人も結婚している人と同じように社会保障が適用されています。この人たちをユニオン・リーブルと言いますが、このユニオン・リーブルの状況をどうやって証明するかというと、市役所に友達と一緒に行って、この人たちはユニオン・リーブルだ

と思います。私たち女性は男性のいる窓口と並んだほうが親切にしてもらえます。異性には親切な国ですよ。

竜楽 ぼくのときは、女性でもだめだったな。魅力が乏しかったんでしょう。

植野 いや、そんなことはないで

植野 フランス人は全体的に、権

利主張ははっきりしていますが、南仏の女性はそれプラス、自分の気持ちに正直というところがあります。つまり、自分の機嫌が悪い時になにも人によくする必要はない。もろに自分の機嫌どおりに生活している人が

多くて、普段接触している同じ人間

でありながら、あれっ、今日はかなり機嫌が悪いな。そういう時にはこちら

さいと言ったら、切手はないと言

と友達が証明するだけでいいのです。

日本に、こういう制度が導入されても、たぶん細かな手続がいろいろ必要だと思えます。同棲しているけれど、どういうかたちでいるとか、何十年一緒に住んでいるとか、何だかんだと聞かれて結局認められなかつたりします。しかし、フランスでは国家というのはそんなに厳密ではなくて、市民が申し述べてきたことに対してちゃんと応えるという意識なんです。日本の場合はやはりお上というかたちで、細かな手続きをとらせて、いろいろ審査してとなります。個人と国家の関係が違うと思えます。そこに個人本位、個人に対する信頼があるんです。

制度の面から日本との違いを考えると、フランスでは労働者に休暇をとらせないと企業主のほうが悪えられるわけですが、以前は6週間の年次有給休暇が、今は8週間になったと言われています。1年間で8週間、休暇をとらなければいけないのです。しかもそのとり方はバラバラでよい

のです。

竜楽 それは義務ですか？

植野 ええ、とるのが義務です。

一定程度の規模以上の企業に課せられています。日本ですと、お盆休暇とか決まった時期にとるといふふう

に、会社本位のかたちですよ。フランスではそういうところで個人の希望が採り入れられています。同様に、労働者の育て方も日本と違いますが。日本はゼネラリストの育成です。銀行などでも、窓口業務もできるし、融資業務もできるし、いろいろなやつてから振り分けをしていきますが、フランスの場合はそうではなくて、最初からスペシャリスト養成です。ですから、窓口の人は窓口だけ。もちろんそのあと研修を受けて、試験を受けて、昇格するということがあります。

これはどういうことかというところ、一カ月以上その担当者がいないというところもあります。例えば外国人の銀行口座を開く係の人が休暇をとってしまうと、外国人が口座を開きた

いといつても、いま彼女がいなくてらだめ。彼女が帰ってくるまで待てとなります。しかし、そういう不便さを国民が共有していて、バカンスなんだからしょうがないということになります。しょうがないということばはフランス語でセラヴィ！（これが人生だ）といえます。バカンスというのは国民の中での価値観としてはすぐ上なんです。フランス人にとつては一番重要なことは恋愛、次にバカンスだと思えますが（笑）。

竜楽 先生が初めて行かれた頃とさほど印象は変わっていないですか。

植野 だいたい同じ感じですが。だけど、長いバカンスを強制的にとらせるようになったというのは、EUが連合になって強い力をもつたことと関係しています。

竜楽 学生さんも、これからますます海外進出の機会が多くなると思えます。そんな時のアドバイスをいただけますか？

植野 とにかく日本人は自己主張がないですよ。だから、だまされ

やすいし、何を考えているかわからないと言われます。私が最初、フランスへ行った時に一番戸惑ったことは何かというと、シ・チュ・ブ、あなたは何をしたいのか、もしあなたがしたいのなら、という言葉です。

日本人は自分の意思を問われることが少なく、何となく全体に合わせて動いている。だからこの言葉がすぐくグサツと来ました。シ・チュ・ブと聞かれると、何をしたいのか考えこんでしまうという感じでした。ですから、自らの意思をもつ、その意思を明確に相手に伝えるということ、これから行く人たちには意識してもらいたいですね。

竜楽 そんな違いの中、向こうで暮らすというのはどうなんでしょうか。

植野 私はフランスに行つてすぐいいなと思つたのは、偏見がないことです。日本だと、例えば離婚した人に対して、あの人が離婚したのはどうしてなんだろうとか、離婚した女性は気が強いとかいう偏見が



口に合いましたか。

植野 私はわりとこつてりしたものが好きなので大丈夫でした。

竜楽 べつに味噌、醬油がなくてもいい。

植野 そうですね。でも、フランス人もこつてりしたものがはっきり食べているわけではないんです。こつてりしたのは1週間に2、3回、夕食か昼食であつて、普段は夕食などもスープにサラダ

やハムとかチーズを食べています。むしろ私はどちらかというと甘いものが好きではないので、デザートが薦められるのが苦手でした。

竜楽 食事の後のデザートですか？

植野 しかも、デザートだけは手作りという場合もあるんです。すごく気合が入っていて、2、3種類作つてある。そういう時に食べ残すと悪いという感じなので、デザートだけ

は困りました。それから、何といても向こうの国際会議は非常にハードなんです。なぜかという、向こうは歓待する、もてなしをするのが

客人に対する一番のことであると考えているので、行けば、だいたい昼、夜、接待が入ります。日本人とはそういうところが違います。中央大学でも国際会議のときに昼食にお弁当を出したりしていますが、私は肩身の狭い思いをしています。日本型の弁当というのはフランス人にとつて、これは何だろう、このあとに本当の料理が出てくるのかなと思うだろうなという気がするからです。

竜楽 向こうは大学で招待されても料理はちゃんと……。

植野 料理は昼に立食ということもありますが、ほとんどフルコースです。学会があるという前の夜からコースで接待が始まります。大きな国際会議になると、予約制で自分がお金を払う場合もありますが、それほど規模の大きくない会議ですと接待が多いですね。食べることは一つ

の仕事なんです。ですから、その間の健康管理も重要な課題になってきます。幸せなことですが。

以前にアビニヨンで、公務員国際学会というのがありました。そこでは劇のフェスティバルがあつて、それに絡めて国際会議を開いてくれて、メインの劇の券を、招待状に付けてくれたんです。ところが、学会が朝から夜まであつて、夕飯の後その劇が夜10時から始まって夜中の2時とか3時に終わるんです。翌日、学会がまた朝から始まりますから、体力が続かないじゃないですか。だから、劇の途中で帰ろうとすると、これからクライマックスを迎える時になんで帰るんだとみんなから責められました。だからそれ以降は、無理をしてクラクラする状態の中で見るようにしましたが、体力勝負といえます。向こうの人は小さい時から肉食ですから、底力はものすごくあつて、3〜4時間ぐらいいしか寝ないのに、朝、ピシツとした格好をしてきちんと学会に出て、いろいろなこと

あつて、自由に生きたり、仕事で頑張ったりすることが正当に評価されなかつたりしますが、フランスではそういうことはありません。平等意識も強いし、困っていたら助けてあげるという気持ち、ボランティア精神もあります。ですから、生活的全体的な感じでは、みんな自由に暮らしていますので、向こうで暮らすというのは、気楽ですね。

竜楽 先生はフランスの食べ物



をまくしたてたりしています。お昼にフルコースが出ると、フルコースにはワインが付いています。皆当然のようにワインを飲みますが、私は午後はほとんど意識不明の状態で学会に出ることもありません。

竜楽 飲んだら頭が回らなくなるでしょう。私も今年の正月、国立演芸場での初席で、その年の最初の落語だったんですが、大晦日から続けてやっているじゃないですか。全然

寝ずに出かけていって、正月ですから一杯と言われて、ひと口飲んで高座にあがってスポットライトをパッと浴びたら、ファーツと何をしゃべるか忘れてしまいました。落語なら忘れても何とかできるんですが、先生方の場合は大変ではないですか。

植野 そうなんです。特に私が出ている国際会議というところ、だいたいフランス語の会議ですから、日本人にはハンディがすごくあるんです。その中で緊張して、

しかも集中力がないと何を言っているのか、どういうことが議題になっっているのかすらも分らなくなってしまう。ましてや、ヨーロッパの人たちは皆さんそうですが、まとめ方が非常にうまいんです。自分の言いたいことを簡条書きのように、一つ、何々、二つ、何々、三つ、何々、それゆえに、こうなんだと理論的な思

考方法でパツと考えをまとめることができます。相手に対しても非常な説得力があります。

その点日本人はそういう発表の仕方方を訓練されていませんから、自分が何かをしゃべりたい時に、短い間に要領よくまとめることがなかなかできない。私は授業の中でも学生に何を言いたいのか、それを納得させるための理由づけをきちっとしなければいけないと言っています。しかし、なかなか出来ませんね。私もそんな発表ができるようになったのは、ここ2、3年です。十数年、国際会議にできるかぎり出るようにして、ようやくという感じです。

竜楽 向こうの人は日常生活で毎日訓練されているんでしょう？

植野 そうです。フランスでは、教授資格試験があつて教授になりませんが、その教授資格試験でも、話し方、手振り、身振り、目のやり方なども教授としてふさわしいかどうか審査されます。日本人は話したり笑ったりする時に口元を隠すというのをよ

くやりますよ。あれは向こうではタブーです。口元を隠すのはウソをついているのではないかと思われま。髪に手をやるのもタブーです。それから、前提となるようなことは早口でしゃべっても、強調すべきところはゆっくり、相手にわかるようにわかりやすく話す。

竜楽 身振りというのは、政治家でもあまりやらないですよ。小泉さんは結構目立っています。

植野 日本人はどちらかというとゲンコツをつくるみたいなの。

竜楽 単純な、限られた……。

植野 そうそう。それから、向こうは目ですね。目の置き所。相手の目をきちっと見て言うかどうか。そういうしゃべり方が重要です。

竜楽 手を使うというのは訴える力が増すんですかね。

植野 たぶんそうなんです。手はきつとエネルギーを持っているので。手振りとか、しゃべり方のペースとか、さらにしゃべる内容のまとめ方、こういうのがすべて

向こうでは教授資格試験の審査の対

象になります。議論するという試験
があって、質問の仕方がうまいかと
か、答え方がうまいかとかを判断す
るのです。だから、話し方とか議論
の仕方やまとめ方が、重要なのです。

竜楽 先生は上手ですよ。

植野 いや、そんなことはないです。

竜楽 落語でもしぐさが一番難し
くて、話の上手い人は、何をしても
手がピタッと決まるんです。

植野 なるほど。日本人は、腕組
みをするとか、手を隠すということ
をやりますね。

竜楽 そうですね。

植野 手の内を知られたくないと
いう言葉もあるように、そういう意
識がちよつとあるのではないかと
う気がします。向こうはそうではな
くて、むしろオープンにする。

竜楽 手を。

植野 そう。オープンにすることが
自分が何者であるかを知らせること
になり、お互いの人間同士のかかわ
り合いを作るといふ感じがします。

竜楽 なるほど。

植野 そうそう。人間同士の関わ
りあいといえば、権利という言葉
フランス語でドワと言いますが、権
利という言葉が日本の生活の中で出
てくることはまずないですよ。と
ころがフランス人は、「あなたには

そんなことをする権利はない」と
いう言い方をします。これって、言
われるほうはすぐショックではな
いかと思います。日常生活の中に
権利という言葉が浸透しているん

です。だから、言われたほうはべつに
ショックではないんです。あなたに
は権利がないと言われると、私には
権利があると反論する。日本だったら、
そういう言葉が飛び交ったら訴訟で
はないかという感じがするけれど。

竜楽

竜楽 日本人の感覚だと、激しい
議論をして、それでも仲がいいとい
うのはなかなか分りにくいです。身
についたものなんですかね。

植野

植野 ええ、身についたものです。
権利主張について言えば、たまたま
遺産の分割に立ち会ったことがあり

ますが、ナプキン一枚もきちつと分
けるんです。普通、日本人だったら、
ナプキンぐらいいどちらが貰ってもい
いじゃないかと思えますよ。それ
を、1枚はこちらにいただきますと
いう感じですよ。そういう権利主張は
すごいですね。

竜楽 すさまじい話ですね。

植野 日本人もちゃんと理解しな
いといけないと思います。それを国
際的な立場で曖昧にしていると、日
本の外交も立ち行きません。外交
官はそういうことを念頭に入れて日
本の立場を主張していかなければい
けないと思います。

竜楽 このへんはいいじゃないか

とか、言わなくても分つてくれるとか。
植野 日本人の考え方は以心伝心
という感じがあって、あえて言う必
要はないとか、2度3度にわたって
言う必要はないだろう、これは分つ
ているからとか、口で約束したから
こんなことは書く必要はないという
発想が多いと思いますが、フランス
ではそれは通用しません。

竜楽 国際感覚をどう養うかが重
要ですね。

これからの大学への期待

植野 そうなんです。今まで日本
とフランスを例にいろいろと話して
きましたが、男女双方が社会で活躍
するのがあたりまえだという時代に
なった以上、持っている能力を活用
することが、個人にとつても社会に
とつても良いことだと思いますし、
そのために大学もあるわけです。大
学も、例えば法科大学院とか、間も
なく出来る行政大学院（公共政策研
究科）といった専門的なものに特化
するような大学院を作って、キャリ
アップを図れるようになってきて
います。

竜楽 いま行政大学院のお話が出
ましたが、先生との関わりとも含め
てご説明いただきたいと思えます。

植野

植野 私は二〇〇五年から開講す
る大学院公共政策研究科（行政大学
院）で立法過程論と比較憲法を担当
することになっていますが、この大

学院は、政策のプロフェッショナルをつくることを目指している大学院です。もちろん研究者養成も考えていますが、国家公務員や地方の上級公務員、国際公務員のような人たちが、複雑化した現代社会において適切な法律や政策をつくることができようにするのが目的です。

私自身も男女平等についての法律を、関心を持って紹介してきましたが、適切な法律をつくり、適切に運用することで、それが人々にとつてより豊かな社会の実現に貢献できればと思います。社会は目覚ましく変化していくのに、法律や政策がついていかれないのでは困ります。そこでそうした専門家を作つていこうというわけです。

また国際的な交流が深まつていく中で、日本の持つている良い面をもっと広い国際的な立場でアピールして、くれるような学生を作りたいし、出てきて欲しいと思っています。

竜楽 そのアピールについてですが、学生が昔は騒ぎ過ぎたけれど、

今はまったく静かにしていますね。

植野 そうですね。

竜楽 昔の大騒ぎも困りものでしたが、あんまりないのも不思議な感じがします。

植野 反応がなさすぎるのもね。

これは別の話になりますが、一つ心配なのは、一方で強い意思を持つて活躍したいと思つている学生も出てきていますが、他方では非常に迷つている学生や、壁にぶち当たつている学生も出てきていることが問題だと思えます。そういう面では中央大学自体も今以上に大学としてのソフト面、つまり相談体制とか、学生にいろいろなかたちで手助けをするべきです。年取つた方から見ると、甘やかし過ぎていのではないかと、甘つたれていのではないかと見られるかもしれません、今の社会は情報が過多になつてきて、いろいろなところから情報が入つてくると迷いが生じるわけです。その意味で、適切な指導をしていかないと、優秀な学生でありながら殻に閉じこもつ

てしまつたり、ある日突然、社会と断絶してしまつて引きこもりかねません。

竜楽 その数が増えていると感じていらつしやるんですね。

植野 我々教員自体も、気をつけ見ていかなければいけないと自戒していますが、増えてきているのを実感しています。現代社会は結構生きづらい社会になつてきていると思えます。挙げ句の果てに最近の日本では、意思決定や自己責任など自分で決めたことはきちつとやれとか言われるようになっていきます。すると自分つていつたい何だろうと思つてしまうのです。ヨーロッパみたいに小さい時からそういう訓練をやつてくればいいと思いますが、ある程度の大人になつてから急に自分で決めると言われても、それはなかなかできないと思います。

竜楽 これからの大学はそういうところのサポート体制が必要になつてくるということですか。

植野 そうだと思います。

竜楽 最後は大学が今後目指すべきことまでご意見をいただきました。今日は本当にありがとうございました。

◇ ◇

数々の国際会議を経験された植野先生のお話はまさに立って板に氷、誠に論理明快で感服いたしました。

これだけ弁が立つんですから副業で落語をやつただけじゃありません。何しろ落語界は女性の割合が消費税にも満たない状況、ですから、女性の地位向上のためにませむお願いしたいところです。入門は竜楽一門が受け付けますがらご心配なく。決して弟子扱いなといたしません。私が落語の稽古をつける代りに先生から法律ネタを教へていただくというのはいかがでしょう。そうすればお互い、シ、ウ、ガありませんよ——

